

二対の斬魄刀

タカ0610

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オリ主によるBLEACHの世界で大切な人を守り抜くために死神となり虚を退治する小説を書いていこうと思います。

BLEACHの完全解釈はできてません すみません なので自分の中での自己解釈も多々あると思いますがそれでも面白くしていこうと頑張ります こうしたら？ この展開はどう？

のようなご意見もよろしくお願ひします。 初投稿なので分かりづらい点もあると思いますが頑張ります。

目次

第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
27	20	14	7	1

第1話

二対の斬魄刀

ここは北流魂街　　霊力によつて東西南北に四分割されている。　　なぜ分割されているのか：　　それは死神候補を見つけやすくし、より多くの候補を死神になるための一つの基準である霊力が留魂街ごとに一定値以上あると南　　それ以下は　西、次に　東、そして　北　と分けられている。　　お気づきの方もいると思うが、北は霊力最弱の集まる流魂街　　通称ゼロ地区　　もう東流魂街以下となると霊力があろうとなかろうと霊力としては　無　に等しいことからゼロと呼ばれている。

霊力も無いに等しく、お先真つ暗であるこの流魂街は日々喧嘩や強奪が繰り返されている。　　霊力がないものだから拳が強いもの、ズル賢いものが生き残れる構図となっている。　　もしこんな生活から脱却したいなら：希望があるとしたら　　死神　　になるしかない。北流魂街の南側にある大きな何十メートルもある巨大な門がそびえ立っている。

その向こう側にあるのが　　死神の世界　　その門ををくぐることができれば虚と戦う死と隣り合わせではあるが、今の様な極貧生活は一転し、華やかな生活が待っているだろう………　　可能性はゼロに限りなく近い。　　他の流魂街なら死神候補に選ばれる可能性がある。　　特に南流魂街は　　しかし、この北留魂街は悲しいかな：　　この街ができて数千年、死神候補　　排出　　は　ゼロ　　なのである。だから夢を見る輩などは極少数　　真面目に働くことを諦めその日暮らしの輩が多い。

そんな中、北流魂街に住んでいる

高坂　☒

(　こうさか　しん　)　　は、　　霊力を持たないことに偏見を持つ事の無い　　唯一　　の友達である　　恋次　　と　ルキア　　と町外れの森で山菜を採っていた。　　恋次とルキアは西流魂街出身の人間
南に次ぐ霊力の持ち主だが、西と北を分けているこの森で迷子になっ

ていた2人を助けたのが友達になるきつかけであった。

「☒ 会うの久々だなー 今日は何年に一度の定期検査だけど、こんなところでオレ達と山菜取りなんかしていいのかよ！」

「そうだな 死神もとい、候補ではあるが これはチャンスのなのだぞ！ みすみす逃していいのか？ 私は、これかもお前と一緒…… いたいんだぞ……」

「ルキア なんだった？ 聞こえなかった そういえば2人も今回の検査で候補生になったんだよな おめでどう！」

「そんなことより山菜も、結構集まったから天ぷらにして食べよう！ やべっ ヨダレ出てきた」

「はあー この鈍感野郎 定期検査受けてみればいいのに」

「そうだな 採れたてを揚げるなんて贅沢だな 早く帰るぞ！ 腹減った」

先程から話題上がっている 定期検査 とは死神候補を見つげるため年に一度行われる検査である。しかし北のゼロ地区は 数千年候補生すらゼロなので やらなくても結果が分かっている様なものだ。なので、他の地区とは違い 数年に一度 の定期検査が今回開催されている。 年々数を増しつつある虚を退治する上に、この検査にも人員を割かなくてはならないので 死神界は てんやわんやである。

今年は何流魂街にも死神を派遣しなければならず 死神界から派遣された人数は…… 2人 他の流魂街は何十人も死神を派遣されているのに北だけ2人は少ないと感じるだろう

只でさえ人員が足りないのに北に派遣したところで、ゼロ地区から死神候補など見つからないだろう 1人でいいのでは？

というのが上の判断だが、バディー制度をとっているため仕方がなく2人派遣ということとなった。 その2人というのが11番隊所属の一角と弓親 である。

「はあー なんでこの俺がゼロ地区で検査しなきゃな

らねーんだよ！　俺は毎年死神になったら面白そうだなーって奴
見つけるのが楽しみでこの役を買って出てるってのに　よりに
よって……　はあ　」

「　ころころ　一角気を抜いてはいけないよ　このゴミ
溜めの中からいくら候補生を探しても　ゴミ　しか見つからないか
らって　本人達を目の前にしてその様なことを言っっては失礼にあ
たるよ　まったく……　」

「　いや、お前が一番酷いからな……　腹黒弓親　ぼ
そ　」

「　えっ☒　なんだって？　」
「　なんでもない　暇だなーって思っただけ……　」

集まる輩も俺ら死神を生で見たい野次馬か　死神になる事を
夢見るメルヘン野郎しかいないもんな……　検査やる意味あんのか
よ　」

「　形式上だよ　一角　数年に一度でもやる事に意味
がある　北だけ検査をやらないととなると不満にも繋がるし、暴動
が起きない様にする為の一つの策だよ　」

ドカーン　街中で破壊音がした

「　なんだ☒　なんか事件でもあったのか？　いやこの霊
圧……　虚か　行くぞー！　」

「　まあ、いいんじゃない？　ここはゼロ地区だし　虚
にとっては餌の宝庫だね　」

「　なにが　いいんじゃない？　だよ　」
「　だって　虚達はゴミの削減に手助けをしてくれてるんで
す　偶には虚も役に立つもんですね　」　ニヤツ

「　んな御託はいいから早く行くぞー！　」
2人の死神は現場へと向かった。

恋次が☒とルキアを守ろうと虚に立ち向かったが、赤子の様に遊ば
れ近くの民家へと吹き飛ばされた。

残った2人だがルキアは虚に怯えて、その場を動こうとしない

☒は大切な友達を守るために一歩前に出てルキアを背で守る形をとった

そんな場面を見た一角達

すぐさま一角は帯刀していた斬魄刀を☒に向かって放り投げた

「ちよつと 一角 何しているんだよ！」

「いいから 面白そうじゃん？ 虚相手に素手では不公平

だろ？ そんなことより隠れるぞ！」

「まったたく… 君と居て退屈しないよ！」

ニヤツ

突如空から降ってきた刀 元い一角が放り投げた斬魄刀であ

るが、☒は辺りを見回すが誰も居らず、素手で戦うと恋次の二の舞いとなるのでルキアを守るためにも刀を手にとり抜刀し虚に立ち向かう。

☒にとって初めての戦闘だった 先手必勝 相手の懐へ

飛び込んだ 虚はそれを読んでいたかのように右ストレート

それにビビった☒は腰が引けた それが功を奏したのかスライディングの姿勢となり攻撃を避ける形となった 避ける際に刀を振り上げ虚の右腕きりおとした。

「やったぞ！ いける」

☒の捨て身の覚悟で挑んだ結果だったが、安堵したことで隙ができてしまった。 虚は痛みはあるもの 残った左腕で☒をなぎ払った。 勢いよく壁にぶつかり受け身を取り損ねた

「ぐはっつ」

血を吹き出し 今まで経験したことのない激痛にのたうち回る。

残るルキアは未だその場を動けず

「次は 女… お前の番だぞ！ グへへ」

ルキアは、虚 怖さにぺたんとその場に座ってしまった。 ☒は刀を杖代わりにし何とか立ち上がった

「ルキア逃げるんだ！ 早くしろ！」

ルキアはあわあわしているだけで☒の声がルキアの耳に届いてい

ない様だ。

「おい 化物！ まだだ まだ俺はやれるぞ！」
吹き飛ばされてもボロボロになっても ルキア を守ろうと立ち上がった。

「 ふん 次は一思いに潰してやるよ 」

そういう虚は標的をルキアから再度 □へと変更した。
守ると決めたものは何がなんでも守る 今の□を支えるのはこの精神力だけ：
ボロボロの身体では攻撃を避けることはできないだろう 狙うはカウンター それしかない 霊力を持たない俺は治癒も鬼道も使えないだから身体を粉にして戦うしか道はない。

虚は先程の□の攻撃を意識したのかストレートでなくフックを選択した。 最後の力を振り絞り刀を虚の顔目がけて投げつけた。 見事刀は虚の心臓である仮面に命中した。 これで虚は倒せたのだが 虚の左フックの勢いはそのままなので□はモロにそれをくらい吹っ飛んだ 吹っ飛んだ先は一角達が隠れていた所だったので仕方なく一角は□を受け取った。 虚は消滅し ルキアは無傷だった。 戦果としては上々である。

「 坊主お疲れさん！ 面白かったぜ 」

そう言い 気を失った□を抱き抱えた。

「 き、貴様ら □をどこへ連れて行く気だ ！ その格好は死神だな なぜ助けに来なかったのだ！ そのせいで恋次と□は… こんなに傷だらけになったのだぞ！ 」

ルキアは泣きながらそう訴えてきた。

そんな言葉を無視し、弓親へ

「 面白いもの見させてもらったからサービスで四番隊の卯ノ花さんのところに連れて行ってやるよ！ 弓親はその女と赤髪を連れてきてくれ 」

「 それではお嬢さん付いてきてもらおうよ 」

そうして死神2人と子供3人は

治療班の元へと向かった。

第2話

四番隊の治療所へ到着した5人　虚に対して勇敢に立ち向かった　2人　は治療が終わっても未だ意識は戻らず　…

そんな2人を大怪我させた元凶の2人は卯ノ花さんにげんこつを貰い　更に、説教されていた。

「あなた達は面白い、面白くないで物事を決めるな　と何時もいつているでしょう！　11番隊の好奇心に　こんな子供を巻き込むなんて何考えているのですか！」

「本当に面白かったんですよ！　ボコボコされて吹っ飛ばされても虚に立ち向かって　」

「太刀筋はメチャクチャですが、これからは楽しみな2人です　」

「　ね！　」

「　ね！　ではありません！　本当にわかっているのですか　」

！　　まだまだお説教が足りないみたいですね……　」

それから2時間お説教は続いた…

その頃、ルキアは2人に付き添い　意識が回復するのをひたすら待っていた。

ちょうど四番隊へ古傷に効く薬が切れたのでそれを受け取りにきた　一番隊隊長である　山本元柳斎重國　少年2人が少女を守るために虚に立ち向かい、更に倒した　ということを四番隊隊員が話していたのを耳にした。

勇敢に戦った2人がどの様な輩か見るために病室へと案内させた。

隊士の説明によると、どうやら赤髪の少年と少女は　今回の定期検査で死神候補生に認定されているということだった。

一方黒髪の少年はゼロ地区出身ということだったが……

2人とも傷は癒え　穏やかな顔で寝ていた

黒髪の少年の手をずっと今にも泣きそうに涙を溜めている少女が握っていた。ふとその手を見ていたら銀色のブレスレットの様なものを少年は身に付けているのが見えた。

「ふむ……意識が戻り次第一番隊宿舎にこの黒髪の少年を連れて参れ！よいな？」

数秒何か考えていたが、隊士にそう言いつけると元柳斎は去っていった。

元柳斎が去って一時間程経った頃ようやく☒は目を覚ました。☒より軽傷の筈の恋次は未だに寝たままだ。☒が目を覚ましたことが嬉しかったのかルキアが飛びついて来た。

「うお！　痛いつて！　いや、痛くない!?!？」

あれだけボロボロにやられたのに、起きたら傷も癒えていた。

「よかった　本当に無事で良かった。　ぐすん

すごく心配していたんだぞ！　目が覚めなかつたらと思うと

怖かった。　それと……☒……ま、守ってくれて

ありがとう　カツコよかったぞ　／／

「うん　／／　逃げろ！つて言っつてんのにルキアつてば

あわあわしてて　いつもの威勢はどこに行つたのやら……

「肝心な事はすぐに忘れるくせに……そのような事はいちいち覚えておらんでよい　即刻忘れよ！」

☒が起きて病室が騒がしくなったのを感じて隊士が入って来た。

隊士　「ようやく起きたか！　総隊長の命によりお前

を一番隊宿舎へと連れてこいとのことだ　付いてこい！」

「　なんかよく分からないけど、　そう言うことみたいだからちよつと行ってくる。　ルキアは恋次が目を覚ますまで一緒にいてくれ！」

「　うむ！　　わかった　一緒について行きたいが　　仕

方がない

早く帰ってくるのだぞ」

所変わって一番隊宿舎前

隊士 「私の役目は受け渡しまでだ あとは一

番隊の方に案内して貰え」

言い終わるとそそくさと隊士は帰っていった。

一番隊隊士に元柳斎の元まで案内され部屋へと☒は入っていった。

「ようやく参ったか 目覚めるのに時間がかったようじやの
儂は、総隊長 の 山本元柳斎重國 である。」

お主は名は何と申すか」

「俺の名前は 高坂、高坂 ☒だ」

「そうか、しん 良い名じやな 早速ですまぬが、お主に尋ねたいことがあるのでな。 まず、お主は北留魂出身と

いうことだが……」

「ん、それがなんかあるのか？ バカにされ慣れてるから

何言われても平気だぞ」

「うむ そうか なら次にその腕輪はどこで手に入れの
じや」

「さつき、北流魂出身と言ったけど、俺は拾われ子だからな。この腕輪は捨てられている時から手にしていた物だとき。 詳しい

ことはよく分かんねえな」

「そうか ……」

元柳斎は、髭を触りながら何か考えている様だ そして：
側近の者にも部屋から出ていくように指示をし 2人

きり となった。

すると、元柳斎は 開眼 した。

「この部屋周辺は儂ら2人のみ そして先程 結界 を

張った　これで他の者にお主の私情を知られることはない

「は、はあ…」

☒はまったく言っていないほど現状が理解できなかった
なぜ出身を聞くのか、結界なんてものを張ったのか　一番隊
宿舎に来てから疑問しか浮かばない。

「それでは、お主の身に付けておる腕輪を外してみよ」

この腕輪は拾われた時から付いてたもので、寝る時もお風呂に入る
時も身に付けているものだったので外そうなんて考えたこともな
かった。　しかし、何だか偉そうな爺さんが外せと
言ってきたので　しかたなく　腕輪を

外した。

突如、爆発的な霊力が☒から放たれた　霊力は隊長格に匹敵する程
のものだった。　かつてない程の霊力を持っていることに
ゼロ　でなかったことに　戸惑いを隠せなかった。

「ほう　なるほどのう」

「な…　なんじやこりやー!!?」

腕輪を外す今まで　霊力を自分の体から感じることはなかった。
だから北留魂街　ゼロ地区　に住んでいたのだが…　力
が溢れてくるこの感覚。

「すげえ　なんだこれ！

この力さえあ

れば： い、痛い　　いてえー！

膨大な靈力に☒　自身が耐えられなくなってきたので　突如激痛が走ったのだ。

「　もうよい　腕輪をはめよ　」

そう言われたので　腕輪を拾い腕に装着した。　途端、

体から痛みは消え靈力もなくなった。　初の靈力放出の副作用なのか定かではないが、疲労が蓄積された。

「　その腕輪は、強力な靈力を持つものが靈力を抑えるために所持する腕輪なのじゃ。　種類は腕輪、眼帯、髪飾など

様々じゃが：　お主は腕輪の様じゃな　その腕輪を外

す許可は、今後わしが一任する!!?　じゃから許可なく腕輪を外す

ことを禁ず　よいな！　」

「　お、おう　：　」

「　調べたところ、今回の定期検査にお主の名前はなかったが、死神候補生　として死神学校への入学を許可する！

今日はこのまま家へと帰り、本日より1カ月後　北留魂街西側

の門より入ってこい　そこに隊士を待機させておくのである。

それと今日あったことは他言無用じゃ　本日はここまで

帰ってよいぞ　」

そう言われたので挨拶だけして　☒は宿舎から出ていった。

「　高坂　☒か：　彼奴はなんなのじゃ　謎ばかりじゃあ

の歳であれ程の靈力を持つものがあるとはな　これからが楽しみ

じゃ　」

ほっほっほ

と高笑いが部屋に響いた

ルキア達のいる病室へと帰ってきた。

恋次も意識が回復しルキアと談笑していた。

「　お待たせ　恋次も元気そうだな！　」

「　おう！　それじゃ帰るか？　それより　☒　一番隊へ

は何の用だったんだ？　」

「　えーつと　（そう言えば他言無用だったんだっけか：

とりあえず適当に誤魔化すかな 勇敢

だったって褒められた。　　それで俺も　死神候補　に選ばれた

「　ええー！　ええー！　ええー！　」

「マジか　　これからも一緒だな　　☒！　　」

「お、おめでどう！　　バラバラになると思っていたがこれからも
よろしく頼むぞ　　」

2人ではしゃいでいる頃、☒はというと　　ルキアとこれから
も一緒にいれるのか、　　今まで以上の時間を過ごせる　　昼

ごはんでルキアから　　あ、あーん　　とかして……
妄想の最中であつた。

3人でワイワイ騒いでいると路地から二人組の凜とした
男と　美しい女性がこちらへと歩いてきた。

「ゴホゴホ　　」

「大丈夫か　　？　　無理はするなよ　　今宵

は夜風が冷たい　　」

「すみません　　あなた　　…　　そ、そんな

どうして

此処にいるの!?!?　　嘘よね　　そんなことあ

るわけないわ　　」

「　どうしたんだ？　　何かあつたのか　　」

「　いえ、妹と良く似た顔の女性が路地から見えたので

…　　ですが、見間違いかもしれませ　　」

「　前から探していた妹の件か…　　分かった

すぐに　隊士に探させる　　それより早く帰ろう

これ以上悪化はさせたくない　　」

「　そうですね…　　」

2人は朽木邸へと帰っていった。

第3話

ルキアと恋路と帰路に着いた

その1カ月後、荷物をまとめ、今まで育ててもらった両親にお礼を言い、死神になる為に北流魂街の門の前に立っていた。

すると門と同じくらいの高さの門番がドツシリと構えていた。

「おい、そこに突っ立ってなにしている。目障りだからどっか行け。ゼロ、の身分でこの場所に近寄るところではないんだ!!?」

俺の視界に入ら無いところにいろ。門を眺めるのはタ

ダだからな。」

ゲラゲラと馬鹿にするように笑っていた。

「俺、候補生に選ばれたから死神界に入りたんだよ。門を開けてくれ。」

「お前のようなひよつ子が選ばれるわけないだろ。ゼロの身分で何言ってるんだ。」

「俺がこの北地区、第1号の候補生なんだ。」

「その子を内側へ入れてやってくれんかのお。」

元柳斎が突如現れた

「総帥!!? お久しぶりです! どうしてこの

様な場に!!? このガキを通すんですかい?

またご冗談を... ここが何地区か、お忘れですか

? クズの集まるゴミ溜めですよ。」

「そうじゃのう。年寄りのきまぐれじゃよ

ほっほっほ。ゼロからの逆転があってもよからう

? わしの権限で通させてもらうぞ!!? よい

な! 神よ早く行くぞ。着いて参れ。」

☒は返事をした後、 門番に向かってドヤ顔で通つたのだった。

「へえ 門の内側はこんな感じになってるのか 前来た時は暗かったしあんま覚えて無いな 」

白を基調とした塀や建物がずらりと並んでいた。

「なぜ死神界と留魂街を分けているか知っておるか小僧 」

「そりゃ区別だろ 勝ち組と負け組の構図だろ? こ

の世界に入れば退屈だった日々を変えられる ルキア達とも離れ離れにならなくて済むしな 」

「そう思われてもしかたがないかのお

ワシからしてみれば北も南も霊力の差など感じないに等しい 」

「んなはずないだろ 俺は元は ゼロ だし… でも、ル

キア達は霊力結構あるんだぞ !!? 」

友をバカにされた様で少し腹が立った。

「それなら、 このワシの霊力を感じてもか? ふぬう !!? 」

元柳斎の霊力を解放すると 地面が揺れ 空気が鉛のように重く

☒は立つことができず膝を着いてしまった。

くそっ! なんだこれは 身体が重い 息が

息ができない く、苦しい 何なんだこのジジイ

辛く顔を歪めた神を見て元柳斎は霊力を解放するのを止めた

途端さつきまでの何事もなかった状態へ戻った。

はあ はあ クソつたれ !!? なんなんだよ

「さつきのを肌で感じて小僧の友達とやらと比べてどうじゃ?

「さつきと比べろって☒ そうなったらさつき言っていた

対して変わらない と感じるかもな 爺さん 俺みたい

な腕輪なんかしてないのにどうして霊力抑えられるんだ? 」

「 そんな物に頼らんでもこの歳になればできるもんじゃよ

ほっほっほ 気絶せんかったのだけ 褒めてやろう

「いきなりやりやがって　　後で：」

「後で腕輪を外して同じ様に霊圧で苦しめてやろう　　：　　じやな

？　　小童　約束を忘れたわけではあるまいな！　　許可なく

腕輪は外してはならん　　とな　　」

凄まじい覇気に圧倒された。

（　　んなわけないだろ　　じいさん　　汗）

「決して外してはならんからのお　　お主にはまだ早いのじや
」

一番対宿舎に到着し　副隊長が出迎えてくれた。

「おかえりなさいませ　　元柳齋先生　　」

「うむ　　ご苦労だった。　　昨日伝えた通り　　小童を一カ月宿
舎で管理する　　」

「それでは早速修行を開始する。　　まずは先程の霊圧に耐えれ
る様にせよ！　　敵と対峙して動けなくなつては使い物にならぬ
からな　　ある程度慣れたら斬魄刀を使って戦闘訓練じゃ　　」

そう言い終わると　　霊圧で俺を潰しにきやがった

最初の頃は、30分で気絶していたが、霊圧に耐える訓練を一週間
続けるとだいぶ慣れてきた。

と　　、　　そこへ

「元柳齋先生　お久しぶりです。　お顔を見に参りました　　」

「山じい元気がーい　　？　　美味しい酒持ってきたぞ！」

「浮竹、　山じいの霊力が漏れてるんだが機嫌が悪い時に来たん
じやないかい？　　」

「山じいと呼ぶのはやめるんだ 京楽 失礼だろ!!? い
つになったら直るんだ。」

確かにいつもこれ程の霊圧は出さないから何かあるんだらうけど
ここまで来たからね 早めに退散するとうるか 京楽

「

「ほっほっほ 来たか小僧共 」「

「おう 来てやったぞ 山じい っと その子供は

流石に山じいの子供ではないよな どうなんだい?

」

「まあそのその様なものじゃな 」「

「おい ジジイの息子にもなったつもりはないぞ!!? 」「

「君! 先生に向かって何ていう口の利き方をしているんだい
直しなさい!!? 」「

「ジジイ 髭オカマ みたいなのと ヒョロい棒がなんか言っ
てるぞ」

「ほっほっほ こやつらもワシが幼い頃から面倒をみて
やとつたからのお お主ら、結界は張っておるから小童に
隊長格の威厳を見せてはくれまいか? 」「

「こんな子供にですか? 幾ら何でもそれは流石にですね…」

ですが、先生がそうおっしゃるなら しかたがないです
ね …… はっ! 」「

「やれやれ面倒だねえ …… よっと! 」「

途端に霊圧が膨れ上がった 一週間耐え切ったから
くっ …… 確かに重いな

か最初頃のように気絶することはなかった。 しかし、2人の隊長
の霊圧は凄まじかったが 耐えることができそうだ。

「おじさん達 隊長なのに 霊圧はこんなもんなの?
こんなのでこの世界は守れるのか…」

立っているのがやつの☒だが、1週間山じいの訓練に耐えた自負
もある。 少し虚勢を張った、

「な、なに？」

平気なのか

まだ子供なのに

そんなはずは……」

「やるねえ 少しは見込みあるかもねえ

山じいの 連れ だし何かあるかもね」

「ほっほっほ

小童 やるのお

シゴキがいがあ

るわい 飲み込みが早くて楽しいのう

この場に隊長格が

3人おるしのう 暴走しても止められるから

小童 腕

輪外してよいぞ こ奴らにも知っておいて貰うと 後々 楽じゃ」

「分かったよ

ビビんなよ お二人さん」

腕輪を外すと一気に霊圧が膨れ上がった。

「これはたまげたねえ

隊長格並みかい？

こんな小さな

子供が あの北地区に紛れていた とは……

これはかなり

の原石を山じいは見つけたねえ」

(僕らもそれなりの神童として通ってきたん

だけどねえ それ以上とは妬けるねえ

これは将来………)

「京楽、凄いで

是非とも13番隊に入つて

欲しいね 僕達も負けていられない

霊圧を

上げ

ゴホッ

ゴホッ

」

バタン

「ちよつと!?」

オカマ隊長、そこの棒が血を

吐いて倒れたんだけど……

血が床に染みるから早く外へ出して貰いた

いんだけど

朝 掃除したばかりだからさ

あー

また掃除やり直しかよ

くそっ」

「心配するのはそつちかい こいつは大物

だねえ 浮竹もはしやぎ過ぎだよ まったく……

四番隊の所へ行くよ 邪魔したね。

山じい また日を改めて来るよ」

「明日は2人共 暇じゃな」

「いや、浮竹は知らないけど　僕は明日は
暇ではな…」 「暇じゃな！」

「ああ　暇だったよ　忘れてた」
「明日の朝から小童の特訓に付き合え」

お主らも　舐められたままではいられぬ
であろう？」

「面白そうだね　分かったよ　後で目を覚ました浮竹に
も伝えておくとするよ」

そう言い残して浮竹を担いで去っていった。

すると、

「小童　何をしておる　床拭きがまだで
あろう？」　ボケつとするな」

「忘れてたー　あいつら何しに来たんだよ
クソがあーー」

と道場内に響いた。

第4話

「 あーー 疲れた 朝からずっと剣術指導とか 地獄 だろ 痛つ 痣だらけだ あのジジイ達も容赦ないよな 木刀でも 殴られたら痛いつてのによお 腹も減ってきたな…… ルキア達 何してるかなー？ 恋次のやつ毎日ルキアと会ってやがるのかな？ 羨ましいな それに比べて毎日ジジイの顔見続けるのも辛いものがある ……」

待て、1カ月特訓とか言ってなかったか？

今は4月で、1月から特訓を始めて

1. 2. 3 …… 3 ☒ (アホ にはならんよ)

マジで俺はアホか!!? 何 あのジジイに流されてるんだよ

1カ月どころか3ヶ月経ってるじゃねーか orz

京楽の奴には色鬼で遊ばれるわ 浮竹には鬼道を吸収されて跳ね返されるわ ボコボコにされて 筋がいい と血を吐きながら褒められても嬉しくもなんともないわ
ジジイは 双魚理 花天狂骨 尸魂界全土にただ1つのみ
二刀一对の斬魄刀 流石に壮観なり ほっほっほ
と笑ってやがる 少しは庇ってくれよ…

「 此処に居たのか 小童 良く特訓に耐えた 明日から候補生を

育てる学校へと入学せよ! 今日の特訓は終わりじゃ 明日に備えよ

話は以上じゃ 」

……

いや、何もかもが 唐突 で文句の1つも言えなかったんだが…
入学式というと、ルキアと恋次に久しぶりに会えるな 楽しみだ
とりあえず寝て明日に備えるか

翌朝の死神候補生の学校の校門前

恋次を見つけた。

「よっ!!?」 恋次 久しぶりだな 元気にしてたか?」

「てめえ、何処ほつき歩いてやがった!!?」 何も言わないで行
きやがって!」

「悪かったよ 時間が合わなくてな それよりルキアはど
うした?」 一緒に来なかったのか?」

「お前が居なくなつてからすぐにルキアも居なくなつたんだよ!!?
あいつも何してんだ

「えっ!!?」 ルキアいないの? 何でお前そんな大切なこと教
えてくれないんだよ!!?」

恋次と一悶着ありそうになった時に周りがざわざわし始めた。

何十人もの護衛の真ん中に居たのは……

ルキア

「ルキア お前何してんだよ 探s… うお!!?」
ルキアに近づこうとすると護衛の1人が束縛道かけた 恋次
にも同様に掛けられた

身動きが取れずルキアたち一行も通り過ぎて行った。
通り過ぎると束縛道も消え、身動きがとれるようになった恋次

「ルキアだったよな」

「見間違えるわけねーだろ 何だったんだ？」

あの人じゃない？ 噂の朽木家の成り上がりでしょ？

え、なににその話 朽木ルキアよ いきなりポンと現れ

て4大貴族の仲間入りってわけよ

気に食わないわね

「聞いたか？ ルキア貴族だってよ」

「ああ、何だつて貴族なんかになったんだよ あいつも

流魂街の貧富の差が激しいのは 貴族たち のせいだ。 ルキアの

ばあさんが死んだのも、貴族の奴らの取り立てで貧しくて薬買えな

かったからだつて恨んでたのによ」

何がどうなつてんだ とりあえず、2人で放課後に跡をつけ

るぞ

クラス表の張り紙にて

「…… 恋次、残念だけれどもクラスは別だな

とりあえず今日は大人しく過ごして放課後にな」

「ああ、 く・れ・ぐ・れ・も 問題は起こすなよ

わかつたな？」

「了解 それじゃ、放課後に校門前で集合な」

何あの赤い髪 センスないわねー 低俗だつてのが バレ

バレ ね 同じ空気吸いたくないわ

「…………… なんだと？ コラ！ ふざけんな」

ちよつ 恋次 まt…

ボコつ 舐めてんのかてめえ この赤髪は気に入ってん

だよ!!？

きやー！　暴力振るわれた。
てめえが悪いんだろ　バカにしゃがって　ぶっ飛ばす！
恋次、お前は　既に　ぶっ飛ばしてんだよ　……
騒ぎを聞きつけた教師によって、恋次は連行された。
……　はあ　恋次　放課後の約束どうするつもりだよ。
とりあえず教室行くか

席はここか　右は　挙動不審な女　左はというと、無言の
喋りかけてくんナオーラ全開の白髪チビ

なんだこの学校は　普通の奴はいないのか　こんなので友達
なんてできんのかよ……　とりあえず右隣に　挨拶でも、

「初めまして　高坂☒です　一年間よろしく」

「は、はひい　わ、わ、私は　江藤　花　でし

痛っ!?　噛んだ　「うるうる

「大丈夫か? あんま　慌てなくていいぞ　」

「あまり人と話したことなくて……」

おい　いきなり暗い過去をほじくり返してしまった。

「まあ、よろしく頼むわ　」

続きまして　白髪チビ

こちらにも初めまして　と先程と同様に挨拶したが、

「……………」

「っておい　こら　無視すんなよ　」

「霊力　ゼロ　のお前なんかと話すことはねえよ　お前がゼ

ロ地区の死神候補第一号つてのは……　見掛け倒しだな　」

「え、ゼロ　だってわかったのかよ!　」

隣では、わ、わかんなかったあゝ　とびっくりしている声が聞
こえた。

「まったく、類は友を呼ぶ　だな　隣同士で　仲良くやつと

け
」

「 ってことは隣同士 お前も友だな いや〜入学早々2人も新たに友達が出来るとはラッキーだな なあ花! 」

「 ええっ わ、私も2人の友達になっただけなの？ 」

う、うれしいよおー …… 」

「 えっ…泣くなよ 花 チビが泣かしたんだからな 」

」

「 チビ言うな 俺には、日番谷 冬獅郎って名前があんだよ 」

」

「 そかそか んなら冬獅郎 よろしくな 」

「 花もチビのことは冬獅郎と呼ぶんだぞ 」

チビ言うな! と、左隣で騒いでる奴は無視しておくことにする。

入学式も終わり放課後

結局 恋次の奴は 放課後になっても説教が終わらず、俺1人でルキア御一行 の跡を付けていた。

しかし、護衛の人数多すぎるだろ どんだけ嚴重なんだよ

ルキアが入っていったのは…この家か で、でかい

なんだこの広さは あれか、住み込みのメイドでもやってんのか? 」

「 ゴホツゴホツ すみませんがこちらに何か用ですか? 」

」

「 えっ! ルキア…ア? さつき家に入っただけだろ 」

まず、こんなに大人びていたか? いや違うだろ 」

もつと小さくて、ぺたんこ 」

だったはず ルキアじゃないとしたら 誰だよ! 」

「 お前こそ誰だ ルキアのそっくりさんよ 」

「 ルキア、妹のこと知ってるの? 」

お姉さん!?? そんな話ルキアから聞いたことないぞ でも、

似てるよな

ということは…ルキアが育ったらこんな美人になるのか

「あら、美人だなんて嬉しいわ」

やべ、口に出して言ってたか

「妹に会っていく？」

「良いんですか？ 是非お願いします。」

「ルキア お友達がいらしてるわよ」

「お姉様、客人とはどちら様ですか？ って☒!? どうしてここに

どうして……」

「お姉さんに入れてもらったよ いや、お前にこんな美人な

お姉さんがいるなんてな それにさ、いつの間にか貴族になって

護衛も何十人も連れて凄いやな！ 友達として鼻が高いよ」

貴様までその様なことを言うんだな…… ぼそ

「☒、お前なんかの身分でこの朽木家の敷居を跨ぐでない

いきなりどうしたんだ？ ルキア…？」

「北地区のゼロでは一生住むことの出来ないところなのだ から即刻立ち去れ」

「お前、やっぱりそんな目で俺を見ていたのか…… 朝の

こともあったから心配してここまできたのに」

「それがいらぬお世話だと言っている」

「ごめんなさいね 今日機嫌が悪いみたい またいらし

てね 家の者にはいつでも通す様に言っておくわ」

「ありがとうございます。お邪魔しました」

なんだったんだ ルキアのやつ あんな大声出してびつく

りした。

明日になれば機嫌もなおってるだろ。

と、☒は安易に考えていたが
と会うことはできなかつた。

翌日

朽木家に行ってもルキア

第5話

次の日もルキアに会いに行つたが会うことは出来なかつた。

「ごめんなさいね　　せつかく来て貰つたのに　　…」　　そうだ

！　あの子のこと教えてくれないかしら　　いろいろあつて幼い頃
ルキアと離れ離れになつてしまつて、　恥ずかしい話だけれど　妹
なのに何も知らないの…　　だから　少しでも　分かりたいの」

「　　そうですね。　　自分が知っている　ルキア　　についてなら
何でもはなしますよ！　　まず、そうですね……………」

ルキアとの出会いやその後の恋次と3人でバカやつたり　ル
キアが自信を持つて大丈夫だ！　　と言ひ張つて　食べた　　笑
い草　事件　　などを話して緋真さんと一緒に笑つた。

「　　なんで、お姉様とあんなに楽しそうに笑つておるのだ　　私だつ
て本当は　☒　と話したいこと沢山あるのに…」　　」

ルキアの声は☒には届かなかつた。

その後も、朽木家の屋敷には通つたが　　ルキアとは会えな
かつた。

「恋次、ルキアと話さなくなつてから4カ月か…」

「そうだな　　あいつは大丈夫なのか？」

「分からない　　屋敷に行つても話せないんだ…　　緋真さんと
ルキアについて昔話したりしか出来てない。」

「やっぱり貴族は貴族専用クラスだしな　　俺たちのクラスとは訳
が違ふんだ。　　ルキアは違う世界に行つたんだな。」

「恋次…　　本当にルキアは幸せなのかな？　　急に貴族になつ

てさ　　お付きの人がいて身動き取れなくて　　校舎が隣でも
スゴく遠い存在だ。　　前みたいと一緒になつてバカなことやれ

たらいいなって あいつが居なくなつて初めて分かった：
当たり前前的事がいつまで続くかなんて誰にも分からない
んだって」

この前の見た？ あの成り上がりでしょ？ なん
の努力もしないで四大貴族の仲間入りするから 他の貴族から
虐められるのよ 怖いわね。

でも、当然の事よ 四大貴族つて名前だけで成り上がり自体に中
身はないもの

!?? ルキアが虐められてる だと？

「どういう事だ おい それは本当か！」

恋次は噂話をしていた 女性に聞いたでした。

「ほ、本当よ！ 貴族の人達にとって異分子が入るのは嫌うで
しょ 格好的なのよ 朽木ルキアの 成り上がり
の存在は……」

「なんだと…… 入学してから4ヶ月、ルキアが朽木家に行ったの
は更に3ヶ月前 ルキアはそんな状態だったのか……」

先ずは、ルキアに会つて確かめてからでも遅くはないはず
屋敷の前で待ち伏せしてみた。

あれ？ 今日はお付きの人はいないのか？ 今しかない

「久しぶりだな ルキア ずっとお前と話したかったん
だ」

「し、☒ !!?」

「ルキア、学校で貴族達に虐められてるのは本当か？ たま
たまその噂を聞いたから 確認したくて」

「……………」

「無言の肯定と受け取ってもいいのか？ ルキア」

「……………」 貴様には関係のない事だ もう、此処に来る

な 毎回屋敷に来て話す事など何もない」

「お前が笑顔なら俺は安心できる。 例え俺たちとは別の次元にいても … お前がいつも辛そうな顔してるから

無理しているルキアをほっとけるわけないだろ!!？」

今のお前の気持ちが知りたい」

……………

「朽木家にまた不純物が入った と 罵られ 屋敷

を出るにしても何十人も護衛がいて 身動きが取れない

周りからも陰口をたたかれ

クラスからも陰湿ないじめを受けて どうしたらいい

のか分からなかった。 誰にも頼れなかった… 周りに

頼れる人なんて誰一人いない環境で お姉様にもお兄様にも

心配かけることは出来ない。

でも、私だけの力では何もできない。 山での

野生の熊との件、候補生になる前の虚との戦いだって いつも お

前達 が助けてくれた。 いつも守られているだけの私だ…

いつまでもお前達に頼ってばかりはいられない」

「そんなことないだろ!!? 頼ってくれて構わない。

お前には俺がいるだろ !!? 恋次もいる 1

人じゃねーんだ。 ルキアと俺では 確かに身分は違う…

北地区の候補生なんて この世界じゃゴミ同然だ

でもな、誰が否定しようと俺は、ルキア お前の味方だ!

」

「☒、ありがとう 助けて欲しい……………」

「ああ、分かっている 恋次もいいな? コソコソ隠れてんなよ

!」

「ちっ バレてたか ルキア ようやく本音ぶつけ

てくれたな」

「俺たちや緋真さん達も助けてくれる そうですよね緋真さん?

隊長?」

「　　そうね　ルキアに　　妹に　　そんな辛い思いさせ
てたなんて　　ごめんなさい　　謝ってすむ問題ではないけれ
ど　　…　　あなた　この問題　頼んでもいいかしら？」

「　　ああ……」

や、やばい　　朽木隊長の殺気が駄々漏れだ。

翌日、校門前にて

「おはよう　☒、恋次」

「おはよ　護衛はもう付かないんだな」

「　　あれから、お兄様とお姉様に今までの辛かったことを話すこと
ができた。お付きの者たちがいて身動き取れなかったこと　　とか
を話したら　　私の意見も取り入れて貰えた。　　二人と
も　　ありがとう。」

「そか。　　良かったな。　　これからは何かあったらすぐに教
えてくれよ　　クラスは違うけど　　俺たちは仲間だ」

ルキアの笑顔何ヶ月ぶりに見るかな？　　とりあえずこの件
は朽木隊長にお任せするしかないか。

早く強くなりたいな…　　大切な人を護れる力が欲しい。

数日後、　　朽木家の家政婦達は総入れ替え　　クラス
の貴族達はお家取り潰しとまではいかないものもそれなりのキツイ
罰を受けたみたいだ　　その後、ルキアへの陰口等もなく
なった。